

連語論から見る「上」+空間名詞」について

高橋 弥守彦

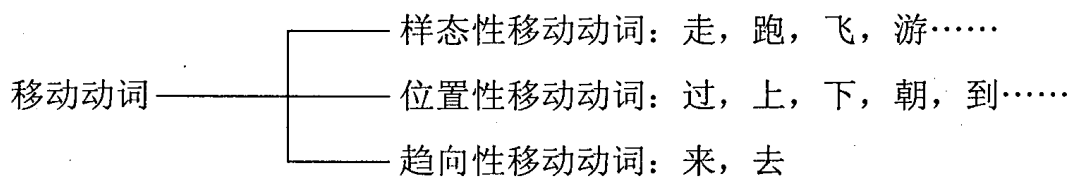
On “Shang + Spatial Noun” from the Point of View of Word Connectivity

TAKAHASHI Yasuhiko

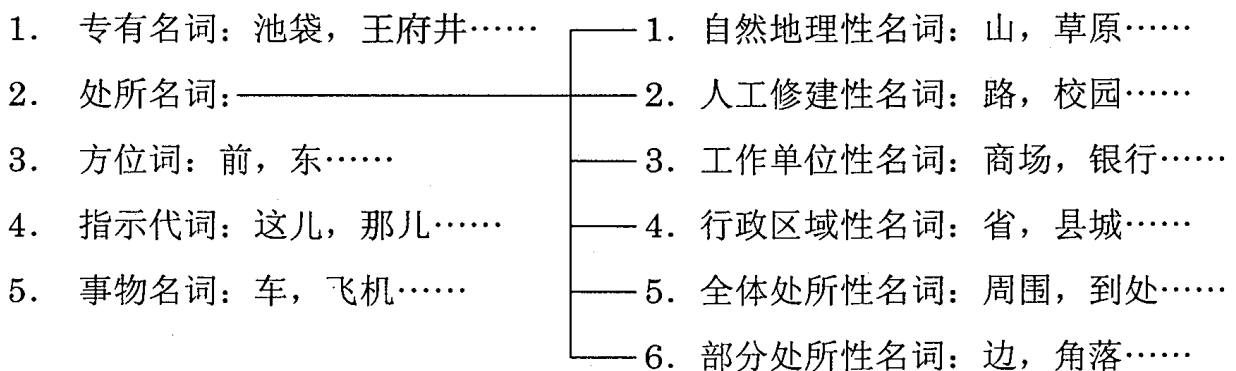
0. 内容提要

本文讨论“上+空间词”里的位置性移动动词“上”和空间词之间的关系。我们将处所词叫做空间词，将空间词和它构成的短语叫做空间词语；把移动动词分为三类[表一]，空间词分为五类，其中处所名词又分为六类[表二]。

[表一] 移动动词的分类



[表二] 空间词的分类



在“上”和名词构成的结构里有“上+空间词”的短语。通过分析“上+空间词”里的位置性移动动词“上”和空间词之间的关系，笔者认为它们并不可以随意搭配，它们的搭配是有语法规则可寻的。空间词可以根据它们的形状分为四类：角度性名词如“坡，楼”等、范围性名词如“银行，公园”等、线条性名词如“路，胡同，桥，隧道”等、平面性名词如“地，天空”等。

我们从短语论的角度分析“上+空间词”里的位置性移动动词“上”。“上”表示“移动”时，可以跟角度性名词“楼，山”等搭配。“上”表示“到”的意思时，可以跟平面性名词“屋顶，山顶”等搭配。“上”表示“去”的意思时，可以跟范围性名词“银行，工厂”等搭配。“上”表示“来”的意思时，也可以跟范围性名词“我家，我们学校”等搭配。

以上我们汉日对比的角度分析了“上+空间词”里的位置性移动动词“上”与不同空间词语的搭配问题。

キーワード

くみあわせ むすびつき 基本義 派生義 位置移動の動詞

目次

1. はじめに
2. 単語の基本義と派生義
3. 意味変化のメカニズム
4. おわりに

1. はじめに

意味の分からない単語を辞典でひくと、一般には (1) (2) (3) ……として、それぞれの意味解釈と典型的な用例が挙げられている。数字で示されているそれぞれの用法は明解に説明されているが、時には、なぜこのような用法があるのだろうかと思議に思うことさえある。さらに言えば、この数字で示されている用法の間に、どのような関係があるのか理解しかねる場合もある。日本語では、この問題を連語論研究の先駆者である奥田靖雄 (1976) が多義語の面から説明している¹⁾。

連語論では核となる単語を中心とする二つ以上の単語の「くみあわせ」を連語と言う。連語は一般にカザリ名詞 (一つまたは二つ) とカザラレ動詞からなりたっている。単語と単語の意味関係によって連語を分類し、一定の意味の実現されている構造的なタイプを「むすびつき」と言う。このむすびつきの中で、奥田は多義語が発生することを見事なまでに言及している。

日本語について、連語論では「むすびつき」のなかで単語の語彙的な意味に変化が起きるとし、多義語の面から単語の意味変化について奥田靖雄、鈴木康之などが言及している。また、筆者にも連語論の方法により、中国語における連語内部の単語になぜ意味変化が起きるのかについて触れた文章がある²⁾。しかし、これは主として、連語内部の動詞と名詞とのむすびつきを分析したものである。このなかで動詞は、動詞の客体となる名詞の形状と、主体が客体となる場所をどのように移動するかとによって、各むすびつきを作る単語の意味に変化が生じることを述べている。単語の基本義と派生義については副次的に若干触れただけであり、それについて、もっぱら論じたものではない。

本稿では中国語における単語の基本義と派生義とについて、位置移動の動詞“上”と空間名詞との関係を中心にして、連語論の立場から連語のむすびつきにおける基本義と派生義とを分析し、多義語となる位置移動の動詞“上”と空間名詞の基本義と派生義、およびそのむすびつきの作る連語の基本義と派生義、そしてそのメカニズムを明らかにする。

2. 単語の基本義と派生義

日本語について、連語論では多義語の面から単語の意味変化について、奥田靖雄や鈴木康之がむすびつきの違いを挙げている。奥田靖雄（1976）は「ひとたびできあがった構造的なむすびつきが、ぎゃくに構成要素である単語の語彙的な内容に働きかけて、その変更、修正、あるいは追加をもとめる」と論じ、さらに「その変化のし方はすべてがひとしいわけではなく、さまざまな段階、形態あるいは程度があるだろう」と述べている。そして、奥田は次のように論を進めている。

むすぶ、まくのような動詞がすでに多義語であるとするれば、おなじような意味あいでは、ほす、わるはまだ多義語にはなっていない。とりつけの構造のなかでの、これらの動詞の語彙的な意味は、*facultative* といっていいたいだろう。これらの連語はかざられ動詞の *valence* によって作りだされたわけではない。構造的なタイプが構成要素の語彙的な意味に修正をもとめて、それにあたらしい *valence* をつけくわえているのである。しかし、いまここでたいせつなことは、単語の語彙的な意味の変化が連語の構造的なタイプのなかで発生し、進行するということである。そして、すでに変化をとげた語彙的な意味は、その構造的なタイプのなかに存在しつづけるということである。

一般に、多義語は、一つの単語が幾つかの異なるむすびつきのなかに用いられて起こる現象である。各むすびつきは、どのむすびつきにも特定のむすびつきを示す単語の数量と位置とが固定されていて、その位置に用いられる単語はそのむすびつきの意味を示す。ある単語がその位置に用いられると、場合によっては単語固有の意味よりも構造的なタイプの作るむすびつきの示す意味が優先される。むすびつきの示す連語論的な意味に影響されて、単語の語彙的な意味に変化が起こり、派生義が生じる。その場合、多義語は連語にみられる構造的なタイプのむすびつきを媒介としている。

たとえば、奥田の挙げる「むすぶ」「まく」という単語は、「もようがえのむすびつき」と「とりつけのむすびつき」のなかに用いられる。「むすぶ」「まく」

は連語論で示すむすびつきの違いにより、動詞に意味変化が現れるので、ひろい意味での一種の多義語である。「むすぶ」「まく」はもようがえの構造のなかでは、次のように用いられる³⁾。

(1) リボンを (チョウ型に) むすぶ

(2) タオルを (おしぼりみたいに) まく

リボンは細長い紐の一種である。その細長い紐をチョウ型にむすぶのだから、リボンの形が変わる。「むすぶ」はリボンの形を変えているので、「もようがえの動詞」と言える。「まく」もタオルをおしぼりみたいにまいて、タオルの形を変えているので、やはり「もようがえの動詞」と言える。このように、「むすぶ、まく」はよくもようがえの動詞としてつかわれるが、もようがえの構造のなかに、第二の対象である場所を意味する名詞をとりこむと、とりつけの構造が作られる。「むすぶ、まく」はとりつけの構造のなかでも、よく次のように用いられる。

(3) リボンを かみに むすぶ

(4) タオルを あたまに まく

「むすぶ」はリボンを髪にとりつけるので、「とりつけの動詞」と言える。「まく」はタオルを頭にとりつけるので、やはり「とりつけの動詞」と言える。上掲の例文のように、「むすぶ、まく」は「むすびつける」「まきつける」の意味で、「とりつけの動詞」としても使われている。ここにはむすびつきの違いにより、意味変化の生じていることが分かる。これに対し、「ほす」「わる」などは、もようがえの構造のなかで、次のように使われる。

(5) おしめを ほす

(6) たまごを わる

上掲の例文のように、「ほす」「わる」は、おしめや卵の形を変えているので、本来、もようがえの構造のなかに用いられる「もようがえの動詞」のはずである。しかし、第二の対象をとると、「むすぶ」「まく」と同様に「とりつけのむすびつき」を作る。「ほす」「わる」は、とりつけの構造のなかでも「むすぶ」「まく」と同じように用いられる。

(7) おしめを さおに ほす

(8) たまごを さらに わる

上掲の例文のように、「ほす、わる」はとりつけの構造のなかにもちこまれると、いやおうなしに、とりつけの動詞としての意味をもたらされてしまう。しかし、「ほす、わる」はとりつけの構造のなかでも、「ほす、わる」の意味であり、上記の「むすぶ、まく」がとりつけの構造のなかで「むすびつける」「まきつける」の意味として用いられているのとは異なる。これが奥田靖雄(1976)のいう「むすぶ、まくのような動詞がすでに多義語であるとすれば、おなじような意味あいでは、ほす、わるはまだ多義語にはなっていない」ということである。いずれにしろ、このように連語論的なむすびつきが構造的なタイプとして固定化されると、それに影響されて、カザラレとして使用される単語の名づける的な意味も規定されることになる。

上記に述べるように、「むすぶ、まく」と「ほす、わる」は客体と共に「もようがえの構造」と「とりつけの構造」のなかに用いられ、「もようがえのむすびつき」と「とりつけのむすびつき」⁴⁾を作る。「もようがえのむすびつき」は二単語、「とりつけのむすびつき」は三単語で作るのが原則である。「むすぶ、まく」は「もようがえのむすびつき」では意味が変わらないが、「とりつけのむすびつき」に用いられると、「むすびつける、まきつける」の意味として使われ意味変化が起きる。「ほす、わる」はどちらの構造にも用いることができるが、意味は変わらない。「むすぶ、まく」は二単語と三単語の異なるむすびつきの構造に用いられることにより、基本義と派生義とが見え、各むすびつきのなかで、基本義からどのように派生義が起こるのかについても、そのメカニズムが見えてきている。

これとはべつに、高橋(2003)では鈴木康之の指導のもとに各むすびつきを図表化し、典型的な例を挙げ、カザラレ動詞と場所を意味するカザリ名詞とをそれぞれ基本義と派生義との二類に分けている。また、カザラレ動詞の第一の対象である客体を<もの><ひと><こと>の三類に分けている。たとえば「もようがえのむすびつき」と「とりつけのむすびつき」における次の図表と例を

見ていただこう。

[表1]〈もの〉のもようがえのむすびつき

～を	～する
もの名詞	もようがえを意味する動詞

くるみをわる。くつをそろえる。さんまをやく。茶をあたためる。たまねぎをいためる。／ノートをまっくろによごす。手ぬぐいをあかく染める。棒をふたつに折る。石をこまかく砕く。／ささあめをたべる。酒をのむ。

[表2]とりつけのむすびつき

～を	～に	～する
もの名詞	場所を意味する名詞	とりつけを意味する動詞

バッジをポケットにつける。針をゆかた地に刺す。クリームを手にもぬる。／手紙をドアにはさむ。花瓶を机の上に置く。新聞をテーブルにひろげる。

この図表と例は、長年連語論研究と教育に携わっている鈴木康之が理想とする「あるべき姿の連語論」という立場から、高橋が鈴木康之の指導のもとに奥田のいう「もようがえのむすびつき」と「とりつけのむすびつき」を図表化し典型的な例を挙げることによって、二つのむすびつきを分かりやすく整理したものである。この図表化と典型的な例は鈴木康之が考えるあるべき姿の連語論を具現化したものであり、この構造的なタイプの図表化に示される名詞の置かれる位置によって、名詞がものを示すのか場所を示すのかが明らかになってくる。さらに高橋は鈴木康之の指導のもとに各むすびつきを意味する動詞を「各むすびつきを示す基本動詞」と「各むすびつきを示せる派生動詞」、および場所を意味する名詞を「場所を示す基本空間名詞」と「場所を示せる派生空間名詞」の二類に分けている。

上記の「むすぶ、まく」は、「もようがえのむすびつき」のなかに用いられても意味が変わらないので、「もようがえを示す基本動詞」と言えよう。しかし、「とりつけのむすびつき」に用いられると、「むすびつける、まきつける」の意味として使われ、意味が若干変わってくるので、「とりつけを示せる派生動詞」と言えよう。「ほす、わる」はどちらの構造に用いられても意味は変わらないが、奥田のいう同じような意味合いを持つ「むすぶ、まく」にならえば、[もようがえのむすびつき]のなかに用いられると、「もようがえを示す基本動詞」であり、「とりつけのむすびつき」のなかに用いられると、「とりつけを示せる派生動詞」と言えよう。「むすぶ、まく」は二つのむすびつきのなかで若干意味が変わるものの、「ほす、わる」はものごとをとりつける場所があるかないかの違いだけであり、二つのむすびつきのなかに用いられても、意味は変わらない。このような微妙な違いのある動詞もあるが、高橋（2003）はむすびつきの違いにより、カザラレ動詞とカザリ名詞の意味の違いがさらにはっきりと分かる例を挙げている。これらを分析すると、連語におけるむすびつきの違いからくる単語の意味変化とそのメカニズムが解明されるであろう。例文を見て検討してみよう。

(9) 徹は部屋を出た。

(10) 屋上まで出る。

(11) バスに乗る。

(12) そういと、貴志はベッドを降りて、服を着はじめた。

「出る」は主体が内から外に移動することである。「内から外に移動する」ということは、換言すれば、主体がある場所を離れることである。例(9)の「部屋を出た」の「出た」は「出る」という動作をする主体が部屋の内から外に移動することであり、主体が部屋を離れるので、連語論では「離れのむすびつき」と言う。「出た」は「出る」本来の意味で使われているので、高橋は「出る」を「離れを示す基本動詞」と言っている。「部屋」は高橋の分類によれば、「人工築造的な名詞」であり、「場所名詞」の一類である。「部屋」はもともと場所を示す側面があるので、高橋は「部屋」を「場所を示す基本空間名詞」と言っている。例(10)の「屋上まで出る」は主体が屋上に移動することであり、主体

が屋上に着くことを意味するので、「出る」が「着く」ことを意味していると解釈し、連語論では「到着のむすびつき」と言う。例(10)の「出る」は本来の意味である「離れ」を意味する内から外に移動する意味ではなく、「到着」の意味で使われているので、「到着を示せる派生動詞」と言い、本来到着を示すことを意味する動詞「着く」などと区別している。ちなみに、「電車の遅れで十一時にやっと学校に着いた」のような、到着のむすびつき「学校に着いた」のなかで使われる動詞「着く」は本来「到着する」の意味を有しているので「到着を示す基本動詞」と言う。なお、高橋の分類によれば、「屋上」は空間を意味することのできる方位名詞を語素としている場所名詞であり、本来場所を示すことができるので、やはり「場所を示す基本空間名詞」と言っている。

上掲の「出る」は、「離れのむすびつき」(例9)のなかで内から外に移動するという「出る」本来の意味として使われ、「到着のむすびつき」(例10)のなかでは「到着する」の意味で使われている。それぞれのむすびつきのなかで「出る」は異なる意味を示しているので、多義語といえ、奥田靖雄(1976)のいう「単語の語彙的な意味の変化が連語の構造的なタイプのなかで発生し、進行するということである。そして、すでに変化をとげた語彙的な意味は、その構造的なタイプのなか存在しつづけるということである」という説の正しいことを立証している。

「乗る」は行為主体が乗り物に乗ることであり、一般的には下から上への到着の移動をいう。換言すれば、「乗る」は「乗る」という行為をする主体がある場所に到着することである。例(11)の「バスに乗る」の「乗る」は「乗る」という動作をする主体が乗り物に乗ることであり、主体がバスの外から中に入ることである。この連語のなかで、バスはものを意味しているのではなく、主体の到着する場所を意味している。単語本来の意味と連語の意味を問題にする連語論では、この連語を「到着のむすびつき」と言う。「乗る」は主体が下から上への到着の移動をすることによって、乗り物に乗るという「乗る」本来の意味で使われているので、高橋は「乗る」を「到着を示す基本動詞」と言っている。「バス」は本来「もの名詞」であり、人が乗る乗り物であり、場所を意味す

る名詞ではないので場所を示していない。しかし「バスに乗る」という連語のなかでは、バスは「乗る」という行為をする主体の到着する場所を意味しているので、高橋は「場所を示す基本空間名詞」と区分して、「場所を示せる派生空間名詞」と言っている。

「降りる」は上から下に移動することである。「上から下に移動する」ということは、換言すれば、主体のいる場所が上にあれば、上から下に移動する主体の行為によって、ある場所を主体が離れることである。例(12)の「ベッドを降りて」の「降りて」は「降りる」という動作をする主体がベッドの上からその下の床に移動することであり、主体がベッドを離れるので、連語論ではこの連語を「離れのむすびつき」という。この「降りて」は「降りる」本来の意味で使われていないので、高橋は「降りる」を「離れを示せる派生動詞」と言っている。「ベッド」は高橋の分類によれば、「もの名詞」であり、ものを意味しているが、この連語のなかでは主体の離れる場所を意味しているので、空間名詞として扱われ、「ベッド」はものを意味するのではなく場所を意味している。本来場所を示す名詞ではない「ベッド」が「離れのむすびつき」のなかでは場所を意味しているので、高橋は本来場所を意味する名詞の「場所を示す基本空間名詞」と「ベッド」とを区分して、「ベッド」を「場所を示せる派生空間名詞」と言っている。

上掲の「バスに乗る」の「バス」が「到着のむすびつき」(例11)のなかで、場所を意味する名詞の位置に用いられると、空間名詞として扱われ、主体の乗る場所を示す。「ベッドを降りて」の「ベッド」は「離れのむすびつき」(例12)のなかで、場所を意味する名詞の位置に用いられると、空間名詞として扱われやはり場所を示す。それぞれのむすびつきのなかで「バス、ベッド」はもの名詞の「もの」としてではなく、空間名詞として「場所」を示している。奥田靖雄(1976)がいう「単語の語彙的な意味の変化が連語の構造的なタイプのなかで発生し、進行するということである。そして、すでに変化をとげた語彙的な意味は、その構造的なタイプのなか存在しつづけるということである」という説の正しいことを立証している。

上記の「離れのむすびつき」(例 9, 12) と「到着のむすびつき」(例 10, 11) は、次のように図表化されるであろう。

[表 3] 離れのむすびつき

～を ～から	～する
場所を意味する名詞	離れを意味する動詞

マンションを出る。会津を発つ。読売新聞社前を出発する。／診察台を降りる。馬から飛び降りる。／ベッドから抜け出す。工事現場から引き揚げる。

[表 4] 到着のむすびつき

～に ～へ ～まで	～する
場所を意味する名詞	到着を意味する動詞

学校に着く。新大坂に到着する。／山に入る。交番へ駆け込む。／屋上まで出る。庭へ飛び出す。／バスに乗る。列車の中まで乗り込む

例 (9) (12) の「離れのむすびつき」は「離れを示す基本動詞」(出る) と「離れを示せる派生動詞」(降りる) および「場所を示す基本空間名詞」(部屋) と「場所を示せる派生空間名詞」(ベッド) とに分かれる。例 (10) (11) の「到着のむすびつき」は「到着を示す基本動詞」(乗る) と「到着を示せる派生動詞」(出る) および「場所を示す基本空間名詞」(屋上) と「場所を示せる派生空間名詞」(バス) とに分かれる。

奥田靖雄 (1976) は多義語が各むすびつきの違いから生じることを指摘し、ここかしこで例文を挙げてそれを説明している。連語論という研究分野で、『連語論 (資料編)』の論文 (特に奥田靖雄の論文) が高く評価されるのは、こういった研究姿勢が土台にあるからである。すなわち、個々の連語にみられるむすびつきを一般化するにあたって、個々の連語にそれぞれ固有の構造的なタイプがあることを積極的に注目しようとしているからである。単に、個々の連語の

むすびつきを説明することでおわっていない。連語全体をとおして、そのむすびつきの種類、むすびつきのあいだの相互関係、むすびつきのあいだの相互移行などをときあかしながら、むすびつきの全体系をあきらかにしようとしている。さらには、むすびつきの発展の法則にまでも論をおよぼそうとしている。また、そうでなければ、個々の連語のむすびつきも、解明されるはずがないとしている。

高橋 (2003) も多義語について、ここかしこで奥田の説が正しいことを例文によって立証しているが、奥田は連語の体系性を明らかにしようとする過程のなかで、多義語の発生を明らかにしたのであり、両者とも単語の意味変化とそれが発生するメカニズムにまで言及しているかということになると、やや不十分なようである。単語の意味変化の面から見ると、奥田も高橋も各むすびつきに使われている例文によって多義語が発生し、単語の意味や機能が異なってくることを証明しているだけのようである。しかし、奥田や高橋が例文によって立証しているように、一つの単語が各むすびつきのなかに使われることによって、それぞれのむすびつきのなかで単語の意味が異なってきたので、どのむすびつきに使われる単語が単語本来の意味を示す基本義であり、どのむすびつきに使われる単語が単語本来の意味から変化した派生義であり、単語になぜ異なる意味が発生するのかを説明し体系づければ、単語の意味変化とそのメカニズムを明らかにできそうである。

連語論のなかでは核となる単語を中心とする二つ以上の単語の「くみあわせ」を連語と言い、連語としての構造的なタイプによって、一定の連語論的な意味が実現されている二つ以上の単語の意味的な関係付けのある集合体を「むすびつき」と言う。一定の連語論的な意味が実現されている構造的なタイプによるむすびつきには、むすびつきの内容規定があり、「とりつけのむすびつき」「とりはずしのむすびつき」「もようがえのむすびつき」などの名づける意味を示す名称がある。連語論ではこのように二つ以上の単語からなる集合体を「くみあわせ」と「むすびつき」の二類⁹⁾に分けている。この「くみあわせ」と「むすびつき」に分類する「むすびつき」のなかで単語の意味に変化が起きる。「く

みあわせ」は単なる単語と単語の組み合わせからなる集合体であり、「むすびつき」は構造的なタイプの作る意味によって分類し、特定の名づけ的な意味を示す二つ以上の単語の意味的な関係付けのある集合体である。ここで次にもう少し詳しく「くみあわせ」と「むすびつき」について検討してみよう。

核となる単語を中心とする二つ以上の単語のくみあわせを一般に「連語」と言う。伝統的な言語学では、連語には陳述的なくみあわせ(主語・述語の関係)、並列的なくみあわせ、従属的なくみあわせの三類があるとされている。このうち連語論が対象とする連語は、一般的に言えば、従属的なくみあわせであり、それはカザリとカザラレとのくみあわせを意味している。すなわち、連語論における「くみあわせ」は次のように規定できるであろう。

連語論における「くみあわせ」:

連語論が対象とする連語は、ある特定の単語を核として(そのような単語をカザラレと言う)、それに特定の単語を付加する(そのような単語をカザリと言う)という集合体によって構成されている。この形式的な集合体を連語論では「くみあわせ」と言う。

カザリ単語とカザラレ単語とのくみあわせは恣意的なものではない。連語の核となるカザラレ単語は、自分自身の意味するものごとをより具体化させるということのために、一定のカザリ単語を支配する。このような連語はおのずから一定の構造的なタイプを内在させている。たとえば、もようがえを意味する動詞(カザラレ)は、そのもようがえの対象となるものを意味する名詞(カザリ)を支配するという構造(連語論的な構造と言える)をとることによって、ある特定の対象物が形態変化をおこすように、人間が働きかけるという意味を実現させている。このような一定の連語論的な意味を実現させているカザリ(カザリの意味することから)とカザラレ(カザラレの意味することから)との関係を連語論では「むすびつき」と呼んでいる。具体的に言えば、「もようがえのむすびつき」「とりつけのむすびつき」「とりはずしのむすびつき」と呼ばれて

いる連語では、「もようがえ」「とりつけ」「とりはずし」などというような連語論的な意味を実現させるために、それに相当する動詞をカザラレとし、その動詞の意味する対象を一定のカザリ名詞で規定するという構造的なタイプが内在しているのである。すなわち、連語論における「むすびつき」とは、次のように規定できるであろう。

連語論における「むすびつき」:

連語論が対象とするカザリ単語とカザラレ単語とのくみあわせは、連語の核となるカザラレ単語が、自分自身の意味するものごとをより具体化させるために、一定のカザリ単語を支配し、一定の構造的なタイプ（連語論的な構造）により、連語論的な意味を実現させている。連語論では一定の構造的なタイプにより、連語の内容に言及するこのような一定の連語論的な意味を実現させているカザリとカザラレとの関係で作る意味的な集合体を「むすびつき」と言う。

単語の多義語は奥田が指摘するように、連語の「むすびつき」のなかでカザラレ動詞に起きる。高橋（2003）は場所を示すカザリ名詞の位置に、もの名詞などが用いられると、ものではなく場所を示すと述べている。同じ単語であっても異なるむすびつきのなかに用いられると、図表で示されるそのむすびつきの位置によって、むすびつきを作るそれぞれの単語がそれぞれのむすびつきを表す意味に変化する。連語のなかで、単語固有の意味よりも、むすびつきの示す意味によって、連語のなかでは単語がむすびつきを示すそれぞれの意味になり、多義語が発生する。高橋はカザリ名詞の一部にも多義的な側面があることを認めている。カザリ名詞にも多義が起こりうると言うことである⁹⁾。

連語論では単語の意味変化についてもカザラレ動詞を中心とする連語の「むすびつき」のなかで起きる、と考えている。次に中国語の例文を分析することにより、位置移動の動詞“上”と空間名詞との連語内部におけるむすびつきの連語論的な意味を明らかにしてみよう。

- (13) 我刚才上楼去了。(『八』 p. 302)
さっき二階へ行って来たところだ。(同上)
- (14) 上了车才想起忘了带件毛衣。(『八』 p. 302)
車に乗ってからセーターを忘れたことに気がついた。(同上)
- (15) 他上汽车了。(『荒』 p. 529)
彼は自動車に乗った。(同上)
- (16) 上坡真累。(『荒』 p. 529)
坂を登るのはとても疲れる。(同上)
- (17) 猫上房了。(『荒』 p. 529)
ネコが屋根に上がった。(同上)
- (18) 猴子上上树了。(『荒』 p. 529)
サルが木に登った。(同上)
- (19) 这孩子会上台阶了。(『荒』 p. 529)
この子は階段を登れるようになった。(同上)
- (20) 旅客上船了。(『荒』 p. 529)
旅客が船に乗った。(同上)
- (21) 他已经上了飞机。(『荒』 p. 529)
彼はすでに飛行機に乗った。(同上)
- (22) 日上中天时, 他的孩子又开始哭起来。(11-3-87)
太陽が中天に上る頃になると、またまた赤ん坊の泣き声が聞こえてきたが、……(同上)
- (23) 她上楼的步子是沉重的, 像灌了铅一样。(12-4-65)
階段をのぼる彼女の足取りは、あたかも足に鉛でも注ぎ込まれたかのように重かった。(12-4-70)
- (24) 喂, 咱们上法院。(12-1-62)
さあ、裁判所へ行きましょう。(12-1-70)
- (25) 上城找县委书记算年初那笔帐! (12-5-57~58)
町へ行って、県委員会書記を訪ね、年の初めのあの件について、か

たをつけてもらうんだ。(12-5-63)

- (26) 洁也回敬丈夫一个甜笑，目送丈夫上了火车。(10-1-87)

潔も甘い笑顔を返し、列車に乗り込む夫を見送った。(10-1-86)

- (27) 昨晚，你半夜上床，不是神气活现地要离婚？(12-1-62)

ゆうべ夜中にベッドへ上がってきて、離婚するって大見得切ったでしょ？(12-1-70)

- (28) 陈小手接过来，看也不看，装进口袋里，洗洗手，喝一杯热茶，道一声“得罪”，出门上马。(12-2-97)

陳小手はそれを受け取り、見もしないで、ポケットにねじこみ、手を洗い、熱いお茶を一杯飲み、「失礼します」と一声かけて、門を出て馬上の人となる。(12-2-104)

- (29) 大幕缓缓拉开，舞台上所有的灯都关闭了，一束光打在了轻快上台的歌手冷春月身上。(10-10-87)

徐々に幕が上がる。ステージの明かりが消え、一筋の照明がかるやかな足どりでステージに向かう冷春月を追う。(10-10-86)

- (30) 下批你再要不到，我就上医院作手术，这辈子不生了！(4-1-102)

この次もらえなかったら、すぐ病院へ行って手術しますからね。一生、子供は生みません！（同上）

- (31) 上班到公司，发现科里的小郭有点闷闷不乐。(10-4-87)

会社に出ると、同僚の郭君が浮かない顔をしていた。(10-4-86)

- (32) 我们好生纳闷，但知道问也没有用，只好叫来了汽车，陪他上街了。

(9-1-101)

僕たちは首をひねったが、聞いても無駄であることは分かっているので、車を呼んできて、街へついて行った。(9-1-100)

- (33) 小男孩忙上前，扯住那两人不让走，双手乱舞，咿咿呀呀地不知说些啥。(8-11-101)

子どもは急いでその前に行って彼らを引きとめ、両手を振り回しながらアアアと何か言った。(8-11-100)

(34) 父亲对儿子说：“上路吧，到時候了。”(16-6)

父は息子に言った。「出発しよう、時間だ。」(16-1)

(35) 我門上教室学习。(作例)

私たちは教室へ勉強に行く。(筆者訳)

(36) 他们下午上我们学校参观语言实验室。(作例)

彼らは午後、私たちの学校へ視聴覚教室を見学にきます。(筆者訳)

(37) 下个星期天，你上我家玩儿。(作例)

来週の日曜日、私の家へ遊びに来てください。(筆者訳)

位置移動の動詞“上”の基本義は「下から上に移動する」角度性移動である。上掲の例文中の日本語訳を見ると、この意味で“上”が使われているのは、例(16)の“上坡”「坂をのぼる」と例(19)の“上台阶”「階段をあがる」などの連語であろう。これらの用法は角度性の移動を表しているので、“上”の基本義と言えるであろう。

また、“上”は例(15)の“上汽车”「自動車に乗る」や例(18)の“上树”「木にのぼる」のように、さらに「到着する」の意味でも使われている。「到着する」の意味で使われる“上”も角度性の移動であり、“上”の対象となる「到着する場所」は高い場所である。「到着する場所」が高い場所なので、この用法の“上”は角度性の移動であるが、角度性の移動そのものを表しているのではなく、角度性移動のなかにおける到着の局面しか表していないので、派生義と言えるであろう。

“上”はまた「行く」の意味でも使われている。たとえば、例(25)の“上城”「町へ行く」と例(30)の“上医院”「病院へ行く」などである。「行く」は一般的には平面性移動である。この移動は現実には平面性移動であるが、「行く場所」を話し手のところより高いところとみなす心理的な角度性移動である。すなわち、これらの例文中の行く場所としての目的地や組織を心理的に高いところと、話し手はみなしている。「行く」の意味で使われる“上”は平面性移動であり、現実の角度性移動から心理的な角度性移動に移行しているので派生義と言えるであろう。このほか、例(33)の“上前”の“上”は角度性移動から平面性移動へ

の移行とみなせ、空間上の平面的な主体の移りを表しているのので、これも派生義である。ところで、社会的な上下関係を表す場合であれば、一般に「前」が社会的な地位の「上」にいる人の位置になる。この意味において「前に行く」ことを“上前”と言う。それが一般化され、上下関係がなくても“上前”と言うようになったのであろう。

また、“上”は例(36)の“上我们学校”「私たちの学校へ来る」や例(37)の“上我家”「わが家へ来る」のように、さらに「来る」の意味でも使われている。「来る」の意味で使われる“上”も平面性移動であり、“上”の対象となる「来る場所」は現実では平面的な場所であるが、話し手はやはり心理的に高いところとみなしている。すなわち、話し手は「私たちの学校」を設備の整った視聴覚教室のある学校とみなし、「わが家」をお客が遊びに来るに耐えうるところとみなしている。「来る」の意味で使われる“上”も平面性移動である。この用法の“上”も現実の角度性移動から心理的な角度性移動に移行しているのので、やはり派生義と言えるであろう。

連語論では動詞と空間名詞とのくみあわせに連語論的な意味と構造的なタイプを構築し、連語の機能を分析する。

上掲の例文の「“上”+空間名詞」のうち、その構造によく似ている例(31)の“上班”、例(32)の“上街”、例(34)の“上路”は連語ではなく離合動詞である。これらは連語ではないので分析の対象から外すが、次節で述べる基本的な意味変化のメカニズムは同じである。

3. 意味変化のメカニズム

本節では単語の意味変化がどのようにして起こるのか、単語の意味変化に関するメカニズムについて、奥田靖雄に倣い上記に挙げた位置移動の動詞“上”によって、連語論の立場から、そのメカニズムを言及してみよう。上掲の連語「“上”+空間名詞」は次のような連語としてのむすびつきを作れるであろう。

i. 移動のむすびつき

“上”

移動を意味する動詞

空間词语

場所を意味する名詞

位置移動の動詞：“上”

場所を意味する名詞：楼(13)，坡(16)，台阶(19)，楼(23)，台(29)

「“上”+空間名詞」の日本語訳：“上楼”「二階へ行ってきた」、「上坡」「坂をのぼる」、「上台阶」「階段をのぼる」、「上楼」「階段をのぼる」、「上台」「ステージに向かう」

位置移動の動詞“上”の基本義は「下から上に移動する」角度性移動である。上掲の“上”の日本語訳に見られる「のぼる」「あがる」は「下から上に移動する」角度性移動を表しているので単語レベルで見れば基本義である。それ以外は派生義と言えるであろう。連語「“上”+空間名詞」における位置移動の動詞“上”の日本語訳「のぼる」「あがる」は、連語レベルで見る「移動のむすびつき」の中でも「下から上に移動する」角度性移動を表しているので「移動を示す基本動詞」と言え、それ以外を「移動を示せる派生動詞」と言えるであろう。

例(16)の“坡”は連語レベルでも単語レベルでも場所を表すので、「場所を示す基本空間名詞」と名付ける。それ以外は一般名詞であり、単語レベルではいずれも場所を表さない。しかし、連語論の表す連語論的な意味では「移動のむすびつき」を作り、主体の移動するところを表す空間名詞である。たとえば、例(16)の“上台阶”「階段をあがる」の“台阶”は主体の移動するところである。主体の移動するところであれば、空間名詞である。このような空間名詞を連語論では「場所を示せる派生空間名詞」と言う。これらの空間名詞はいずれも形状別に見ると角度性の空間名詞である。

上掲の「“上”+空間名詞」に対応する日本語訳は多少問題があるようである。“上坡”「坂をのぼる」を除き、“上楼”は「上へあがった」、「上台阶」は「階段をあがる」、「上楼」は「階段をあがる」「上台」は「ステージにあがる」と手直しの方がよいようである。このうち、典型的な「移動のむすびつき」はヲ格の

空間名詞と位置移動の動詞「のぼる」「あがる」で表す場合であろう。これを本稿では「移動のむすびつきにおける基本訳」と言う。しかし、へ格と二格の空間名詞でも言語環境によっては移動のむすびつきを表現できる。たとえば、例(13)は「さっき上へあがって行ったばかりだ」、例(29)は「……一筋の照明がかるやかな足取りでステージにあがる冷春月を追う」と訳したらどうであろうか。例(13)は「さっき上へあがって行く」と訳すことにより移動を表せ、例(29)は「かるやかな足取りで」が文中にあることにより、やはり移動を表せる。これを本稿では「移動のむすびつきにおける派生訳」と言う。

これらの日本語訳から、「移動のむすびつき」における「“上”+空間名詞」の“上”と空間名詞に対応する基本的な日本語訳は「ヲ格の空間名詞」と「のぼる」「あがる」と言え、本稿ではこの訳を「移動のむすびつきにおける基本訳」と言う。たとえば、例(16)の“上坡”「坂をのぼる」や例(19)の“上台阶”「階段をあがる」である。これ以外の訳を「移動のむすびつきにおける派生訳」と言う。

ii. 到着のむすびつき

“上”

移動を意味する動詞

空間词语

場所を意味する名詞

位置移動の動詞：“上”

場所を意味する名詞：車(14)，汽车(15)，房(17)，树(18)，船(20)，飞机(22)，火车(26)，马(28)

「“上”+空間名詞」の日本語訳：“上车”「車に乗る」、 “上汽车”「自動車に乗る」、 “上房”「屋根にのぼる」、 “上树”「木にのぼる」 “上船”「船に乗る」、 “上飞机”「飛行機にのる」、 “上火车”「列車に乗り込む」、 “上马”「馬上(馬に乗る)」

位置移動の動詞“上”の基本義は「下から上に移動する」角度性移動である。上掲の“上”の日本語訳に見られる「のぼる」は「下から上に移動する」角度性移動を表しているので、単語レベルで見れば基本義であり、「乗る」は意味が異なる。

ってくるので派生義と言えるであろう。連語「“上”+空間名詞」における位置移動の動詞“上”の日本語訳「のぼる」は、連語レベルで見る「到着のむすびつき」の中では「下から上に移動する」角度性移動を表しているわけではなく到着の局面を表しているだけなので、「到着を示せる派生動詞」と言えるであろう。

上掲の“汽车”などの単語は単語レベルではもの名詞であり、場所は表さないが、連語レベルでは場所を表す。たとえば、“上汽车”は連語論的な意味では「到着のむすびつき」を作り、“汽车”は主体の到着するところを表す空間名詞である。空間名詞はいずれも形状別に見ると角度性の空間名詞である。このような空間名詞を連語論では「場所を示せる派生空間名詞」と言う。

上掲の「“上”+空間名詞」に対応する日本語訳は“上车”「車に乗る」、「上汽车」「自動車に乗る」、「上房」「屋根にのぼる」、「上树」「木にのぼる」、「上船」「船に乗る」、「上飞机」「飛行機に乗る」、「上火车」「列車に乗り込む」、「上马」「馬上(馬に乗る)」である。これらの訳から、“上”は“上”の到着する場所が乗り物であれば「乗る」、乗り物以外であれば「のぼる」と言えるであろう。“上”の基本訳は「のぼる」「あがる」であるから、「乗る」は派生義である。到着のむすびつきにおける「のぼる」は下から上への移動を表しているのではなく、到着の局面を表す「のぼる」なので、この訳も派生義と言えるであろう。「到着のむすびつき」におけるこれらの日本語訳を本稿では「到着のむすびつきにおける派生訳」と言う。

典型的な「到着のむすびつき」は“到北京”「北京に着く」のような二格の空間名詞と到着を意味する動詞とで作る場合であろう。これを本稿では「到着のむすびつきにおける基本訳」と言う。上掲の「到着のむすびつき」における「“上”+空間名詞」の“上”と空間名詞に対応する日本語訳は「二格の派生空間名詞」と“上”の到着する場所が乗り物であれば「乗る」、乗り物以外であれば到着の局面を表す「のぼる」なので、これらは「到着を意味する派生動詞」と言えるであろう。たとえば、例(14)の“上车”「車に乗る」や例(17)の“上房”「屋根にのぼる」などである。「“上”+空間名詞」のこれらの日本語訳はやはり「到着のむすびつきにおける派生訳」と言えるであろう。

iii. 空間的な移りのむすびつき

“上”

空間的な移りを意味する動詞

空間词语

場所を意味する名詞

位置移動の動詞：“上”

場所を意味する名詞：法院(24)，城(25)，床(27)，医院(30)，前(33)，教室(35)，我们学校(36)，我家(37)

「“上”+空間名詞」の日本語訳：“上法院”「裁判所へ行く」、「上城」「町へ行く」、「上床」「ベッドへ上がってくる」、「上医院」「病院へ行く」、「上前」「前に行く」、「上教室」「教室へ行く」、「上我们学校」「私たちの学校に来る」、「上我家」「我が家へ来る」

位置移動の動詞“上”の基本義は「下から上に移動する」角度性移動である。上掲の“上”の日本語訳に見られる「行く」「来る」は「下から上に移動する」角度性移動を表しているわけではないので、単語レベルで派生義と言えるであろう。連語「“上”+空間名詞」における位置移動の動詞“上”の日本語訳「行く」「来る」は、連語レベルで見ると「空間的な移りのむすびつき」の中でも「下から上に移動する」角度性移動を表していなく空間的な移りの意味を表しているだけなので、「空間的な移りを示せる派生動詞」と言えるであろう。

例(33)の“前”は方位名詞であり、単語レベルでも連語レベルでも位置を表すので、「場所を示す基本空間名詞」と言えるであろう。それ以外は場所名詞と場所名詞連語であり、連語レベルでも単語レベルではいずれも場所を表すので、「場所を示す基本空間名詞」である。連語論の表す連語論的な意味では「空間的な移りのむすびつき」を作り、場所を表す空間名詞や空間名詞連語は主体の移るところを表す空間名詞である。これらの空間名詞は方位名詞“前”を除き、いずれも形状別に見ると範囲性の空間名詞である。

上掲の「“上”+空間名詞」に対応する日本語訳は、多少問題もあるようである。たとえば、“上床”「ベッドへ上がってくる」は、「ベッドへ来る」と直す方がよいだろう。「上がってくる」は空間的な移りではなく「山を上がってくる」のよ

うに「移動のむすびつき」を作る場合に使われるからである。典型的な「空間的な移りのむすびつき」は、二格とへ格の空間名詞と視点のある趨向移動の動詞「行く」と「来る」で表す場合であろう。たとえば、“去北京”「北京に行く」である。これを本稿では「空間的な移りのむすびつきにおける基本訳」と言う。上掲の例(26)の“上法院”「裁判所へ行く」は、“上”が「下から上への移動」を表す角度性移動ではなく、空間的な移りを表す「行く」の意味で訳されているので、これを本稿では「空間的な移りのむすびつきにおける派生訳」と言う。

これらの日本語訳から、「空間的な移りのむすびつき」における「“上”+空間名詞」の“上”と空間名詞に対応する基本的な日本語訳は「二／へ格の空間名詞」と「行く」「来る」のむすびつきと言え、本稿ではこの訳を「空間的な移りのむすびつきにおける基本訳」と言う。これ以外の訳を「空間的な移りのむすびつきにおける派生訳」と言う。

4. おわりに

単語の意味変化は奥田靖雄(1976)が多義語で指摘するように、むすびつきの違いによって生じる。中国語ではむすびつきの違いは同じ動詞であれば、動詞のどの局面とむすびついているかによって生じる。たとえば、“上”は「下から上へ移動する」という意味が基本義である。この意味で使われる場合は「移動のむすびつき」を作る。「到着する」の意味で使われる場合は「到着のむすびつき」を作る。「行く／来る」の意味で使われる場合は「空間的な移りのむすびつき」を作る。連語のなかで基本義として使われていれば基本動詞であり、派生義として使われていれば派生動詞である。

位置移動の動詞“上”の客体は単語レベルでは空間名詞ともの名詞である。もの名詞であっても連語における上掲の各むすびつきのなかでは場所を表している。単語レベルでも場所を表し、連語のなかでも場所を表す名詞であれば基本空間名詞であり、単語レベルでは「もの」を表し、連語のなかに入って場所を表す名詞であれば派生空間名詞である。

「“上”+空間名詞」で作る連語も各むすびつきを表す基本的な意味であれば、

「各むすびつきにおける基本訳」であり、派生的な意味であれば「各むすびつきにおける派生訳」である。

以上の位置移動の動詞“上”とその客体にみられる基本義と派生義との関係、および連語に見られる基本訳と派生訳との関係から、“上”とその客体となる空間名詞がどのような形状の空間名詞であるかによって、いろいろな連語論的な意味を示す「むすびつき」が作れ、むすびつきを作る構造的なタイプによって各単語に派生義が生じ、単語に意味変化が起こるというメカニズムが存在すると言えるであろう。

奥田はむすびつきの違いにより日本語の動詞に意味変化が生じることを認めたものの、名詞に意味変化が生じることまで指摘するにいたらなかった。本稿では日中対照研究をすることにより中国語の動詞にも意味変化が起こり、名詞にも意味変化が生じることを指摘し、各むすびつきにも各むすびつきにおける基本訳と派生訳とがあることも指摘している。日本語研究者である奥田の考えに倣いながら、日中両言語の対象研究をすることにより、奥田の不足を若干補え、中国語の「“上” + 空間名詞」もむすびつきの違いにより、“上”と名詞とがそれぞれ多義語になることが解明できたであろう。

¹⁾ 奥田靖雄 (1976) にこの説あり。

²⁾ 高橋弥守彦 (2002) に動詞と名詞の結びつきに規則があることを論じている (p. 54~60)。朴鐘漢 (2000) に認知文法の立場から、“过”についての多義語に関する研究がある。高橋とは研究方法が異なり、各論では高橋と意見が異なるが、全体的に言えば優れた論文である。

³⁾ 高橋弥守彦 (2003) に例(1)から(8)までの文あり (p. 16~17)。

⁴⁾ 奥田靖雄 (1983) に「もようがえのむすびつき」「とりつけのむすびつき」「ゆくさきのむすびつき(到着のむすびつき)」「離れるところをあらわす連語(離れのむすびつき)」の術語あり。説明と例文もある。

⁵⁾ 鈴木重幸・鈴木康之 (1983) に「くみあわせ」と「むすびつき」の術語あり。

⁶⁾ 奥田靖雄 (1983) では多義語についてもっぱら動詞に起こる現象としていたが、鈴木康之の指導のもとで、高橋 (2003) では連語論における構造的なタイプを示すことによって、カザリ名詞にも多義語が生じることを明らかにしている。

資料と例文

1. 星哥 等 (1988~1997) 「ショートショート」『人民中国』人民中国出版社
2. 刘家林 等著 柯森耀 译『中国語学購読シリーズ 中国ショートショート』第一集～第六集 外文出版社
3. 彭见明 著 中川正之 木村英樹 沈国威 小野英樹 編注『那山・那人・那狗』帝社

主要参考文献と略称

1. 荒川清秀(2003)『一步すすんだ中国語文法』, 大修館書店『清』
2. 荒屋勸(1995)『中国語常用動詞例解辞典』, 光生館『荒』
3. 奥田靖雄(1976)「言語の単位としての連語」『言葉の研究・序説』(1985)言語学研究会編に所収 むぎ書房
4. 言語学研究会編(1983)『日本語文法・連語論 (資料編)』 むぎ書房
5. 高橋弥守彦(2002)「移動を表す動補連語“走进来”について」『外国語学研究』第3号 大東文化大学大学院外国語学研究科「高1」
6. 高橋弥守彦(2003a)「移動を表す動補連語“走回来”について」『語学教育研究論叢』第20号 大東文化大学語学教育研究所「高2」
7. 高橋弥守彦(2003b)「位置移動動詞と空間語の関係について」『外国語学会誌』No.32 大東文化大学外国語学会
8. 高橋弥守彦(2003c)「格付き空間名詞と〈ひと〉の動きを表す動詞との関係」「高3」
9. 方美麗(2002a)「〈行く先の結びつき〉～日中対照分析～」『外国語教育論集』第24号 筑波大学「方1」
10. 方美麗(2002b)「連語論〈移動動詞と空間詞との関係〉—中国語の視点から」『日本語科学11』国立国語研究所「方2」
11. 朴鐘漢(2000)「認知文法による現代中国語多義語の研究」『中央大学論集』第21号 中央大学「朴」
12. 朴貞姫・崔健(2004)「空間経路表現の日中対訳」『日中言語対照研究論集』第6号 日中対照言語学会 白帝社「貞」
13. 松本曜 田中茂範(1997)『空間と移動の表現』研究社出版
14. 丸尾誠(2005)『現代中国語の空間移動表現に関する研究』白帝社
15. 李臨定著／宮田一郎訳(1993)『中国語文法概論』, 光生館『李』
16. 呂叔湘主編／牛島徳次監訳・菱沼透訳(1992)『中国語用例辞典』, 東方書店『八』